

2008 年度 岩本ゼミ活動報告

三木 康平

春合宿

春合宿は有馬で行いました。

2 回生は『1997 年ー世界を変えた金融危機』（竹森俊平著、朝日新書）を輪読した。この本は先生の紹介で春合宿に使用することを決めた。

この本はアジア通貨危機が世界を襲い、日本では大手金融機関が次々と倒産した 1997 年に着目し、過度の悲観主義が世界を覆った時、人間心理はどう動くのかを「ナイトの不確実性」を駆使しながら検証している。1997 年の通貨危機を勉強することによって、現在直面しているサブプライムローン問題に端を発した金融危機について自分の頭で考える良い契機になったと思う。

3 回生は各自が興味を持つテーマを選び、それについての簡単な研究発表を行った。後期の論文の執筆、もしくはディベートを行う必要があったので、主体的に経済に関するテーマを考える練習をする必要があると考え、この形式を採用した。様々な観点から国際経済についてのアプローチがされ、相互に勉強になったと思う。

勉強以外では有馬だけに温泉に入って、疲れをとり、またバーベキューで先生、TA、ゼミ生で親睦を深めました。またみんなで夜遅くまで部屋でしゃべり、2 回生と 3 回生がお互いを知る良い機会になったと思う。

前期ゼミ

今期のゼミは 16 期生に 10 人の 2 回生、15 期生に編入の 2 名を加え、2・3 回生で 22 人という経済学部の中でも最も大きいゼミの 1 つとなった。

テキストは前年度から引き続いて『International Economics ~theory&policy~』（Krugman, Obstfeld）を使用し、後半の国際金融を輪読した。2 回生と 3 回生がペアを組み、輪読をしていく形式を採用した。2 回生は英語のテキストを理解することに苦労したと思うが、各自が一生懸命勉強して内容を理解していたと思う。改善点を挙げるならば、発表の担当でない時は意識が低かったように思われ、今後発表担当をランダムにして、常に勉強する環境作りをしていくべきと思う。

サブゼミでは 1 年間を通して、主に 2 回生がミクロの勉強をした。ゼミ後に行ったので部活やバイト等でコンスタントに全員が出席できる状況ではなかったが、それでも出席率は高かったように思われる。3 回生の磯貝君が中心となってミクロを指導したことによって、2 回生のミクロに対する理解は確実に深まり、今後の経済学の勉強に役立つと思う。

夏合宿

夏合宿は倉敷で行いました。

後期のインゼミに向けて事前にグループ分けを行っていたので、グループ毎に夏休み中にミーティングを重ね、夏合宿の場で中間報告を行った。先生や TA から指摘・アドバイスをいただいた。これにより各班の課題が浮き彫りになり、後期に向けて新たにスタートを切った。

ホテルでは卓球やビリヤードで遊び、かなり楽しいものであった。その後は岡山の美観地区等で観光を行い、良い思い出作りが出来たと思う。また自動車で倉敷まで行ったので車中でそれぞれ楽しくコミュニケーションを取れたと思う。

後期ゼミ

後期のゼミはインゼミに向けての途中経過を報告し、先生からのフィードバックを受ける場とした。昨年と同様にディベート班、ISFJ 班、三大学班の 3 つにチーム分けして、インゼミに向けて勉強した。

ディベートは例年通り高崎経済大学の矢野ゼミと行った。テーマは「1998 年から 2005 年の間に日本の不良債権比率低下により貢献したのは金融システム安定化政策か、それとも景気回復か」である。岩本ゼミは「金融システム安定化政策」で立論し、矢野ゼミは「景気回復」で立論した。今回はテーマ自体を決定するのに時間がかかり、準備時間が十分には取れなかった。結果的には岩本ゼミは負けてしまったが、金融危機に苦しんでいる現在において、日本の過去の経験を勉強したことは有益だったと思う。

ISFJ 班は「外貨準備の有効活用～東アジアの発展に向けて～」というテーマの論文を執筆した。理論と実証分析から日本の抱える外貨準備の水準が過大であり、余分な外貨準備を使って政府系ファンドを設立しようという議論を展開した。勉強をしていく中で、外貨準備に関する政府の動向により肝を冷やす状況があったが、計量分析・論理展開のしっかりした論文が完成し、本番の発表も上手に出来ていたと思う。またモデル分析、データ集

め等役割分担がきちんと出来ており、チームとしての出来は素晴らしいものだったと思う。
班内の調整役として一生懸命頑張ってくれた小田さんと豊島君に感謝したい。

三大学班は恒例になりつつある大阪大学の阿部ゼミ・神戸大学の中西ゼミとの研究論文発表会に向けて論文を書いた。当初はエネルギー資源の乏しい日本がアジア共同体という枠組みでそれらを調達し、安定的に日本産業に供給することを主眼とし、そのメカニズムが日本を含む各国にどのような経済効果をもたらすかという制度設計に関する論文を執筆しようと試みた。しかし先行研究が少なく、資源価格の高騰と急落によりテーマとして適切でないと判断した。そこで EPA を締結した際に生じる域内国企業と域外国企業の戦略の意思決定について空間経済学からのアプローチを試み、経済協力等による東アジア経済圏の構築を急ぐべきであるという結論を出した。3つの班の中では最も準備期間が長かったが、議論の余地はまだまだあり、ゼミ生がより主体性を持って意見を出し合えば、より精密さのある論文になったと思う。

後記

岩本ゼミとして 1 年間無事に活動することが出来たのはひとえに先生・先輩方の助けがあったからにほかありません。改めて感謝します。

ゼミ活動は、自ら国際経済学というテーマをより専門的に勉強すると選択し、仲間と共に助け合いながら切磋琢磨する場であった。その中で普段の講義とは違う緊張感の中、勉強し、またゼミ生同士の絆を深めることも出来たと思う。またチームで経済学に関するディベートを行い、また論文を執筆することはゼミ活動の醍醐味であり、初めて経験する 2 回生には新鮮なものであっただろう。その経験を活かして、新しく入ってくる 17 期生といっしょに新たな 1 年を全力疾走してほしいと思う。3 回生は就職活動等で忙しい中で 2 回生を引っ張ってくれたと思う。ゼミでの経験を今後の進路選択に役立てて、また来期のゼミ活動のサポートをしてほしいと思う。

今期のゼミ活動では、良い点もあっただろうが改善すべき点も多かったと思う。来期は全員が一致団結して、問題点に対応しながら、岩本ゼミを京都大学随一の魅力的かつ、アカデミックな空気を楽しむことの出来る場にしてほしいと思う。

最後に私事となりますが、ゼミ長として一生懸命頑張ったつもりですが、至らない点が多く、後悔することが山のようにあります。そんな中でも 1 年間支えてくださった先生・先輩方・ゼミ生に感謝したいと思います。ありがとうございました。